

書評と紹介

サンドラ・シャール著

『『女工哀史』を再考する

——失われた女性の
声を求めて』



評者：倉敷 伸子

I

序論によれば、本書は、45点の糸ひき歌、及び長野県を主な就労先とする元製糸女工（本稿では本書記載に従い「女工」の呼称を用いる）とその関係者70名の「生の語り」を通して、「複雑で多面的」な彼女たちの過去（3頁）を再構成し、女工たちの生活史についての包括的な「知識体系」を構成することを目指す（29頁）ものである。

日本の産業資本の形成を特徴づける製糸業研究は、戦前以来の膨大な蓄積をもつが、その労働者である女工を、雇用システムに独自のアプローチを行った主体として捉えた本格的研究は、東条由紀彦『製糸同盟の女工登録制度——日本近代の変容と女工の「人格」』（東京大学出版会、1990）まで待たねばならなかった。その後、榎一江が労使関係とは異なる「労働」の視点から工場の労務管理制度を検討する（『近代製糸業の雇用と経営』吉川弘文館、2008）など、研究の幅が広げられた。ここにライフ・ヒストリーという形で女工たち自身の言葉が加わ

れば、主体としての女工の輪郭がさらに明確になろう。なにより、片倉製糸が全工程自動化実現を謳ってから既に70年がたっている。多くの元女工の「生の語り」を得ること自体、極めて貴重なことである。それを生活という視座から分析するという本書の企図は、読者の期待を十分に高めるものである。

II

まずは、内容を紹介します。

目次

序論

第一部 日本の製糸業

第一章 戦前までの日本の製糸業の発展

第二部 〈糸ひき歌〉の分析——製糸女工の失われた歌声を求めて

第二章 〈糸ひき歌〉とは何か／第三章 糸ひき歌と製糸工場へ働きに行くこと／第四章

糸ひき歌と製糸工場における労働の世界／第五章

糸ひき歌と製糸工場における生活世界

／第六章 糸ひき歌と製糸女工の自己表象

第三部 製糸女工の聞き取り調査の分析

第七章 ライフ・ヒストリーに即した製糸女工の〈声〉の分析／第八章 製糸工場に出ること

／第九章 製糸女工と工場労働の世界／第十章 工場生活（寄宿生活）の記憶

／第十一章 製糸女工と労働争議という抵抗形態／第十二章 製糸女工の経験についての表象

結論

附論

序論は、映画『あゝ野麦峠』をテレビで見た元女工の感想——「糸取りってそんなへばいも

んじゃあなかった」——からはじまる。この言葉を引き取った著者は、「彼女たち自身の生活世界という現実」から描く歴史の必要性を説く。主張の前提として批判の俎上に載せられるのが、戦前期の女工を「資本家から搾取された被害者」として描く「女工哀史言説」（以下〈哀史言説〉と記す⁽¹⁾）である。著者は、〈哀史言説〉に、女工の「声」の分析を対置する。それは「歴史の人格化」を求める行為であり、同時に、当事者の歴史観、個人のパースペクティブを対象とする歴史観から「包括的・網羅的歴史観」を得る試みでもあるという。

さて、製糸業史を先行研究で跡付けた第一部の後、第二部は、山本茂美『あゝ野麦峠』等に掲載された45編の「糸ひき歌」の分析を通し、女工たちの意味世界を探る。歌の多くは明治期から大正期に歌われていた。著者は、歌詞の類似や流行歌の援用を抽出し、歌に「決まり文句の文化」が介在していることに注意を促す。歌詞から、自分とは異なった地方や労働環境の歌も歌っていたことを読み取り、女工たちが「製糸工場の女性労働者」という集団的自己認識をもっていたと推測する。歌詞の内容は、故郷に対する両義的な視点や、おかれた状況を嘆く一方で侮蔑的なまなじりに抗うなど、矛盾した自己表象を示す。著者は、そこに、近代化渦中の労働者に共通して見られた自己認識があると指摘する。

第三部は、女工たちのライフ・ヒストリーの記録である。第三部の狙いは、彼女たちの語り

が、〈哀史言説〉に包含されるか否かを検討することにある。著者は、元女工たちの「生の声」を通して、女工やその家族は、資本主義がもたらした就労の機会に反応して経済的困窮からの脱出を図った点で「積極的な行為の主体」であり、それは文化的要因にも規定されていたこと、女工自身は工場労働の「辛い」体験、特に糸検査のストレスを語りはするが、多くは「精出してやった」という表現で工場の基準を受け入れており、そこに「生の喜びの感覚」がみとれること、元女工たちは、製糸工場での労働を、「女工を疎外し萎えさせる非人間的なもの」とは捉えておらず、それは工場生活が、映画やプロマイドなどの消費生活を楽しんだり、恋愛の相手を選ぶなど、「近代化に面するきらめく窓」となったことにも関連することを指摘する。米飯・毎日の風呂・就労後の自由時間などの寄宿生活は「他の女性たちの羨望的となっていた」面もあり、多くの者にとって、工場生活は少なくとも「不幸の軽減」と捉えられていた、というのが著者の考察である。一方、彼女たちの語りには労働組合や争議に触れたものは非常に少なく、争議当事者になった女工も「不承不承巻き込まれた」という印象だと観察する。この消極的対応について、著者は、女工が、家族に対する責務の自覚をもち、そのためには個人的な希望やプライドを捨てる覚悟があった証と捉える。第三部の最後に、〈哀史言説〉と語り手の証言の比較をし、映画『あゝ野麦峠』に対する元女工たちの違和感、あれは作

(1) 〈哀史言説〉とは、本書によれば、「哀れで悲惨なイメージを強調し「無抵抗な犠牲者」として女工を表象する、「画一的」で「究めてネガティブ」な「今日まで支配的」な「社会的イメージ」を指す。戦前のマルクス主義が社会的表象として広め、以後、「抑圧及び搾取の伝統的構図」を「過激な表現」で訴える村上信彦や塩沢美代子らも採用する「マスター・ナラティブ」となったという。なお、評者は、著者が言う〈哀史言説〉をイメージすることはできるが、「今日まで支配的」という点については留保が必要だと思う。また、戦前マルクス主義から村上信彦、山本茂美までを同一視する研究史整理は、歴史構築主義か否かを基準とする評価としては了解できるが、本書のテーマでもある当事者の主体化という点ではそれぞれ独自のアプローチを試みており、〈哀史言説〉として一括するのはいささか大雑把に感じた。

り事だという発言を拾いあげる。

結論部で、本書の調査分析は次のように位置づけられる。製糸工場労働の苛酷さを記した同時代の調査は、工場の内部のみに注意を向け、農村での社会経済的な現実という側面を無視した問題があり、また1930年代以降のマルクス主義者らが広げた〈哀史言説〉は、女工たちの農村での社会経済的な現実や、彼女たちの日常生活の現実を見落とし、脱落のある、時には偏見のある表象を再生産した。しかし、本書の元女工による証言は、出稼ぎ型賃労働が、女工たちに「ある程度の独立心や満足を与えた」という「事実」を明らかにした。彼女たちの「声」は、彼女たちが、「社会的および文化的環境」から影響をうけて家族の利益を重んじ、工場へ働くことを正当化していたことを示す。すなわち彼女たちの言説は、彼女たちが、自らの労働に主体的な価値を見出そうとした存在だったことを表すものである。

III

かつて、経済史が女工に向けてきた関心は、低廉な賃金で日本の資本主義形成を支えてきた労働者という側面に集中していた。また、労働者の組織化に主体の成長を読もうとする政治的立場が、組織率の低い女工に対して、その固有の主体性を読み取る作業を等閑視してきた歴史もある。本書が、元女工による自己表象を通して、女工の時間を労働のみならず生活の細部にわたり描き出した意義は大きい。評者はそこに、女工を、自身の生を引き受けた主体として再定義したいという著者の強い意思を読み取った。

もっとも、元女工たちが、自分たちの経験を〈哀史言説〉とは位相を異にするものとして捉えていたこと自体は、しばしば言及されてきた。例えば、本書が〈哀史言説〉と見做す山本

茂実『あゝ野麦峠』（朝日新聞社、1968）は、元女工たちが「生き生きと目を輝かして」その経験を語ったことを記し、マルクス主義経済学の泰斗である中村政則も、『労働者と農民』（小学館、1976）で、元女工が「家の助けが出来ると思うとうれしかった」と回顧する姿を書き留めている。本書の成果は、この自己表象が、矜持、悔しさ、嬉しさなど様々な感情が交差する固有の経験の上にあることを示したことにあろう。読者は、本書を通して、女工経験というのが多面的かつ多元的要素で構成されていたことを知る。

例えば、聞き取られた言葉は、元女工たちが「みんなそうだった」というフレーズを繰り返し用いていることを読者に示す。その「みんな」の意味を気にしつつ語りをたどると、「近所の衆も皆製糸工場へ出たもんでね」、「当たり前、私らのむらではみんな行っただ」、「糸とらん娘は嫁に行けん」という言葉に出会い、読者は、ムラの生活と製糸工場就労とが同一の地平にあることを思う。

また、工場労働の辛さを語りながらそれを「当たり前」と回想する発言に対し、著者は、これを貧苦に慣らされた従順さと片づけることなく、辛さを当然とする感覚を支えている言葉に注意を促す。それらは、「我慢した」、「辛抱した」という表現と共にあり、そこに辛抱を美德や誇りとする規範意識を垣間見ることが可能となる。逆に、流布された「国のために働く女性」という言説は、労働する者の誇りの裏付けとしては、ほとんど語られなかったという著者の指摘も、重要であろう。

従来は主体性の表れと捉えられてきた争議について、著者は、元女工の発言から、むしろ争議に巻き込まれない者としての意思を読み取っているが、その論拠として紹介される山一林組争議に遭遇した元女工の発言は、読者にまた別

の視角を与える。彼女は、「争議中は寄宿舎で遊んでいた」と自分の立場を語ったのち、争議の歌について「みんな忘れちゃった」、「みんなが仕事や生活に苦しんでいるっていうような、そういう歌ばかりでしたよねえ。あんな歌あんまり好きじゃないから」と言う。本書第二部は、主に1910年前後に歌われていたと思われる「糸ひき歌」の生々しく具体的な歌詞から、「強い怒りや反抗心」を剔出しているが、その20年後の工場ではそれらは歌われなくなっていたという。土着的な発想と節付けで口ずさまれていた歌とも、「仕事や生活に苦しんでいる」労働歌とも馴染まない感性が若い女性を捉えていたことに、女工の近代的「洗練」を知ることができないだろうか。

IV

一方で評者は、本書を読みながら頁をめくる手が止まることがあった。それは、著者が掬い上げた「女工たちの声」は、どこに、どのように納められるべきかについて、考えが行きつ戻りつしたからである。思考が攪乱されることは意味あることと思うので、以下に私見を述べ、本稿読者の判断を仰ぎたい。

「女工たちの声」の取り上げ方として、本書は以下の方法を採用している。本書が女工たちの「生の声」とする70名のうち、実際に著者が直接対面インタビューをしたのは40名、他は岡谷蚕糸博物館紀要編集委員がまとめた1993年実施の聞き取り調査と、1993年の女工・検番座談会の発言者である。彼女らの就業期間は1910年代から戦後まで多様である。著者は、それら就労先も出身地も就労時期も発言の場も様々な人たちの語りを、就労の背景、工場での労働、寮生活など、著者が設定した場面ごとに切り分け、発言者名は付せられてはいるが一律に「女工の声」として、〈哀史言説〉に対置す

る。「映画『あゝ野麦峠』という映画の中では、女工の生活が哀れなものとして描写されています。これについてはどう思いますか。」と質問し、「それほどに思わない」という発言を引き出す(348頁)。評者の懸念は、この方法が「女工たちの声」を〈哀史言説〉の対抗言説に回収してしまわないかという点にある。本書は「女工たちの声」に注目する意図を、「歴史的真実の楽観主義的な追究」ではなく、歴史の「知識体系」を「当事者の歴史観」により「包括的」にすることにあると説明している。評者はこの意図を、構築主義の地点に立って、「正しい歴史」の特権性を排し歴史像の豊富化を図る試みとして理解した。とするならば、「女工たちの声」に対して求められているのは、反〈哀史言説〉言説を立ち上げることだろうか。個別の経験をもつ個人として、その半生をたどり、それぞれの自己表象の意味を内在的に理解することではないか。各人の自己表象は、女工以後の生活も含めた経験の後に作られる。各人の異なる経験が構成する多声的な歴史像を受け止めることが、むしろ女工の経験を一元化する〈哀史言説〉への批判ともなると、評者は考える。

また、著者は、「女工たちの声」から得た「当事者の歴史観」を、本書の歴史像に段差なく接合する。例えば、本書は、故郷での生活規範を重んじて自ら就労を選択したという元女工の語りを記録する。これは、当事者として偽りのない歴史認識だろう。しかしこの言葉が、そのまま女工の自律性の証左として扱われる時、そこに、「当事者の歴史観」の可視化と、「当事者の歴史観」の事実化の混同があるように思えた。評者は「当事者の歴史観」に対して歴史叙述者ができることは、「当事者の歴史観」を、歴史叙述者が自身の名において時代状況や規範との関係のなかに位置づけ、その意味を捉えることだと考えたい。特に、就労選択についての

当事者の自律性については、女工に向けられたジェンダー規範の歴史性（例えば、加藤千香子『近代日本の国民統合とジェンダー』日本経済評論社、2014）や、工場規模の変化を要因とした工場選択基準の変容（東條由紀彦『近代・労働・市民社会』ミネルヴァ書房、2005）とどう交差するのか、本書著者の見解をききたかった。

多声的歴史像を受け止めつつ、それを構造のなかに捉えるのは困難な作業である。その方法論の構築は、オーラルヒストリーを採用して歴史を捉えようとする人々全体の課題でもある。

V

本書には、映画『あゝ野麦峠』の「悪いイメージ」に対して、「昔の日本では当たり前のことでした、これを伝えてください」と著者に訴えた藤原かず子さん、発言者のなかでは珍しく、工場労働を「セクハラだった」「搾られた」という言辞で捉えた気賀沢百合子さんが登場す

る。二人の発言は〈哀史言説〉を軸とすれば正反対の立場だが、自らの経験を元手に独自の女工言説を構築する姿勢では共通している。彼女たちが手繰り寄せた女工時代の記憶は、その後の経験のなかでどのように書き重ねられ、それぞれの人生をどう支えてきたのだろうか。ジェンダー、共同体、市場の論理などいくつかの問題群をくぐりぬけてきたであろう歴史を、女工経験と重ねて是非知りたいと、この労作を読んで思った。そのような多面的分析の可能性を、著者が聞きとった「女工たちの声」はもっている。

なお、本書は2020年度和辻哲郎文化賞を受賞した。

（サンドラ・シャール著『『女工哀史』を再考する——失われた女性の声を求めて』京都大学学術出版会、2020年2月、ix + 495頁、定価6,820円（税込）

（くらしき・のおこ 四国学院大学文学部教授）